

**平成 28 年度
川上村地域づくり
インターンシップ
参加学生報告書**

『平成 28 年度川上村地域づくりインターンシップ報告書』

京都女子大学 家政学部 生活造形学科 3 年

秋田 麻菜香

<目次>

- ① はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
 - ② 川上村への提案
 - (1)人知のシェアハウスについて・・・・・・・・・・ 1-4
 - (2)インターンシッププログラムについて・・・・・・・・ 4
 - ③ インターンシップを終えて、川上村とのこれからのつながりについて
大学の食堂へ間伐材割り箸を導入・・・・・・・・ 4-5
 - ④ 川上村地域づくりインターンシップの感想・・・・・・・・ 5-6
-

<①はじめに>

- ・ 大学では建築を専攻していて「場づくり」というものに興味があった。
- ・ 木が好きで、「林業」に興味があった。
- ・ 自然と距離の近い「里山」に興味があった。

以上のことより川上村地域づくりインターンシップでは興味のある分野をすべて学べると思い参加した。

<②川上村への提案>

(1)人知のシェアハウスについての提案

- ・ 人知のシェアハウスとは

人知地区に今年度完成した役場が運営する、川上村へ移住を考える若者単身者向けの共同住宅。同世代の人が共に生活し、きれいで使い勝手のいいシェアハウスに住むことで、田舎へ移住するハードルを下げるのが狙い。吉野の杉檜がふんだんに使われている広々とした空間で、家賃は共益費込みで一万八千円と価格の低さも魅力的。

今回のインターンシップでは女子 4 名がこちらの多目的スペースである和室に 2 週間滞在していた。

- ・ 建てられた経緯

以前は交流館が建っており、集会所や今回のような短期滞在の宿泊施設として使われていた。建物の老朽化に伴い建て替えられた。

- ・ 人知

- ・ 比較的小さな大字で子供の数はほぼ0に近い。
- ・ 当番で大字内の神社にお供えものをしているが、高齢化に伴い当番を回す人数が減少している。
- ・ トチや山椒の季節になると山に入り、家で保存食を作っている人もいる。
- ・ 畑ではご近所のお母さんたちが集い世間話に花を咲かせている。



白屋地区から見た人知



人知の方々の畑



いただいた山椒の葉の佃煮



- ・ 人知の方々のシェアハウスや若者に対する思い

- ・ 誰が住んでいるのかわからない。
- ・ 自分たちがシェアハウスの掃除をしないといけないと思っている人もいる

(はじめは人知の方からシェアハウスに対して自分たちにできることはないかと役場へ提案したところ、掃除を手伝ってもらうのはどうかという内容だったが、一部の人しかこの正しい経緯が伝わっていなかった。)

- ・ ごはんを作ってくれる人を雇っていると思込んでいる人もいる
- ・ 祭りやイベントの音頭をとってほしい
- ・ 移住者を歓迎している

→誤解していることもあり、シェアハウスの取り組みや狙いが十分に伝わっていないのではないかと。人知の方々と役場の意思疎通がうまくできてないように思えた。

お話をしていると私たちインターン生に「シェアハウスでごはんでも作って一緒に食べれたらよかったね。」と言ってくださった。人知の方々は若者と交流することに積極的な様子であった。その言葉を受けて以下の提案を思いついた。

・ シェアハウス活用の提案

人知の方々とシェアハウスに住む若者の交流を生むために、シェアハウスの共同スペースで定期的に人知の方々と旬のものを使った料理などを作り、**ごはん会を開催**する。

↓そのための交流の第一歩として↓

1. 普段鍵がかけられてある通り土間の扉を開放しておく

せっかく通り土間に二つも扉があるにも関わらず山側の扉はいつも締められていた。通り土間は座るスペースもあり、涼しいので一休みするのにちょうどいい場所である。そこで、扉を開放しておくことで人が行き来しやすい流れを作る。ふらっと座ってもらえるとそこで住人と交流が生まれる。



共同リビング



通り土間

2. シェアハウスの敷地内に掲示板を設置し情報共有を促す

敷地が広く、大字の中心に位置するシェアハウス。屋外にある縁側付近に掲示板を設置することでごはん会などのイベントの情報共有を促し、掲示板へ立ち寄りがてらに縁側で交流してもらおうことが狙い。



シェアハウス玄関



通路に面した縁側

3. 裏にある畑スペースを一部人知の人に貸し出す

今のところシェアハウスの住人のために残されている畑用スペースが活用されていない。今後田舎暮らしに憧れる若者が入居してきた際、初心者が畑を一から作ることは難易度が高いように思える。そこで人知の人に一部スペースを貸し出すことで若者の先生役になってもらう。畑を通じて交流を生むことが狙い。

メリット

(人知の人)

- ・ 野菜作りがうまい高齢者にとって教えること生きがいになる
- ・ シェアハウスにどんな人がいるか知るきっかけになる

(若者)

- ・ 畑づくりへのハードルが低くなる
- ・ 人知に馴染むきっかけになる

(両者)

- ・ 畑づくりを通して交流が生まれる
- ・ 獲れた野菜を使って一緒にごはんを作る



畑スペース

デメリット

- ・ お互い生活リズムが合わない可能性がある
- ・ 区画割りなどで不公平が生じる可能性がある

以上3点の提案で人知の方々と若者の距離を縮めることで、シェアハウスに立ち寄りやすい流れができ、ごはん会開催への道につながると期待出来る。

また、シェアハウスが完成した際に行った内覧会でごはん会までできるくらい理解、交流が進んでいたら今回のような誤解は生まれていなかったのかもしれない。

(2) インターンシッププログラムについての提案

「2週間14日間のプログラムに+1日して、15日間のプログラムへ変更」

14日目に行われる報告会の後、もう一泊する。そうすることで報告会での提案のフィードバックをもらう、お世話になった人にもう一度会いに行く、一緒に過ごした仲間と振り返りをするなど様々な活動が可能になる。フリーな状態で川上村での楽しかった思い出を振り返ることで、もう一度川上村へ来たいという気持ちになる。知ってもらっただけで終わらない、そういった期待を込めている。

<④インターンシップを終えて、川上村とこれからのつながりについて>

大学の食堂へ間伐材割り箸を導入

国産間伐材の割り箸は「香りが高く、丈夫なのでご飯がより美味しくなる」

その割り箸を大学の食堂に導入することで、木に関心がない学生に国産の木を意識して

もらう。日本の林業が衰退しているということよりも日本の木で作られた箸で食べる方がご飯が美味しいということに気づいて欲しい。

自分が通っている大学ではすでに国産割り箸が導入されているが、最近輸入物の割り箸に戻されつつあるのでなんとか食い止めたい。吉野材が理想。

<⑤川上村地域づくりインターンシップの感想>

木、田舎、ものづくりなど自分の好きなものが川上村にはたくさんあると思い参加したインターンシップ。中身は想像以上で毎日新しい発見の連続でした。

本当に充実した2週間でした。1日限りの勉強プログラムには参加したことはありませんでしたが、こんなに内部の人の考えや気持ちを知ることができたのは初めてです。やはり2週間滞在してこそ得られる成果だったと思います。泊まれたのが大きかったです。集まったインターン生7人はそれぞれ違った分野を専攻し、同じ行程を過ごしていても考え方や興味が及ぶ範囲が異なっているところも刺激的で、大きな気づきとなりました。

実際に目で見て聞いて感じる情報はテレビや本でみるより何倍も鮮明で自分の中にずっしりと入っていく感覚がありました。例えば子供の声がすると活気づく、そうは知っていましたが、実際に目の当たりにしてみるとよく分かりました。声があるだけでその周りが明るく感じました。そのように川上村を通して日本が抱えている問題を自分に軸を合わせて知ることができました。

木が売れない、人が少ないなどと暗い話をするけれど、その裏では川上村で木製品を作り出す、樽の材料を作る、間伐材で割り箸を作る、一般の人向けに森林レクチャーを行う、川上村の野菜に可能性を見出す、ダムを活用する、田舎が味わえる宿の作る、林業をバーと組み合わせるなど、限られた土地や資源に大きな可能性を見つけて全力を尽くしている、川上村でしかできないことに取り組む人がいるということが分かりました。前向きで、あたたかい方々とたくさん出会えてとても嬉しかったです。日本が抱えている問題を自分一人で抱え込もうとするのは無理があるけれど、川上村の方々が自分の出来る範囲で取り組む姿を見ていると、自分にもなにかできるのではないかと思いました。

それから、村のお母さんたちが言っていた「気の合う仲間が集まればここは大阪の繁華街やけえ」「一度村外に出たけどやっぱり川上村がいいから戻って来たの」これらの言葉が頭から離れません。そう言える土地ってなんて素敵なのだろうって思いました。自分の地元でそんなこと感じたこともありませんでした。地元に戻ってから地元を改めて見直そうと思いました。

この2週間無駄だと思えることは一つもありませんでした。こんな人もいるんだ、こんなものもあるんだと、何かをする度に視野が広がりました。川上村で得た経験、知識

がいつか自分の中で役に立つときが来ると思います。

最後に、今回川上村役場の方をはじめ、村の方々に地域づくりインターン生として様々な体験をさせていただいたことを深く感謝いたします。

平成28年度川上村地域づくりインターンシップ報告書

立命館大学 政策科学部 政策科学科
2回 上谷 意織

目次

1. インターンシップに参加した理由
2. 川上村への提案
3. インターンシップを終えての川上村とのこれからのつながりについて
4. 川上村地域づくりインターンシップの感想

1. インターンシップ参加理由

- 農村部での人々の生活に興味があったため
- 豊かな自然に触れながら学ぶことが出来るため
- 様々な人の意見を聞き、人生観を広げたいと考えていたため

2. 川上村への提案

～提案1～

実際に2週間、北和田と粉尾で暮らしてみて感じたこと

- 村内での人と人の関係性が強い
- 高齢者の方がいきいきと活動している
- 村民の方に話しかけると積極的に話をしてくれる
- 高齢者などに向けた制度が多くある
- 交通手段が主に車しかなく東部や西部の人は中心部に行くのが面倒
- 村民の声がうまく役場に届いていない

これらから感じた問題点

- 人が集まって話す場は喫茶店などが主で気軽にいつも集まれる場所が少ない

- 意見や用があっても役場に行く足が遠ざかっている
- 災害時などに避難所として集まれる場所が少ない

私が考えるこれらを解決することが出来る施設

☆かわかみらいふ☆

かわかみらいふとは

- 平日はいつでも開いている
- 移動スーパーを受託し村民ならではのコミュニケーションを大切にする
- 出張診療所を行う
- コミュニティの場になる

かわかみらいふに着眼点を置いた理由

- インターンシップ中に訪れた施設の中で個人的に1番好きな場所だったため
- 私自身が考える地域づくり論と一致していたため

それに伴っての提案

- 村内にかわかみらいふのような機能をもった施設を増やす

↓

村民のコミュニティの場が増える
役場との距離が近くなる
災害時に集まれる場所が明確になる

↓

さらに村民にとって暮らしやすく安心して生活できる村になるのではないか

～提案2～

観光客増加をはかった情報発信

現時点での宣伝では、対象が川上村をすでに知っている人が主となっているため、対象を広げ川上村を知らない人にも知ってもらう必要がある

情報発信の方法の例

- ラジオやメディアを通しての宣伝
- 電車などの交通機関での中吊りを利用したの宣伝

～提案3～

観光案内の強化

多くの観光客が立ち寄る道の駅での村内の観光案内が弱い

↓

道の駅で村の観光資源を絡めた案内や商品を増やすことで観光客がさらに村について知ることが出来る

例えば・・・

鮎やアマゴのシーズンに釣り具の1日貸し出しをする
小冊子などで村の歴史と観光地を簡単に説明する

3. インターンシップ後の川上村との繋がり

インターンシップを終えての私と川上村が繋がり3つある

1つ目は、川上村で学んだことを私の生活の中で実践することである

2つ目は、SNSなどを通して外部に川上村について発信していくことである

3つ目は、私が実際に川上村へ訪れ今回のインターンシップで得た人との繋がりを守り続けることである

この3つを行うことで私は川上村とこれからも繋がり続けていけるのではないかと考える。

4. インターンシップの感想

インターンシップの感想

- 座学や実地での学習を通して村をしっかりと知ることが出来た。
- スケジュールに盆踊りや、やまいき市などの行事も多く盛り込まれており、村民の方と関われる機会が多く用意されていた。
- インターンシップの後半には自由に動ける時間が用意されており、インターン生それぞれが取りたい行動がとれた。
- 寮などではなく、村の中で2週間生活することでかなりリアルに村について知ることが出来た。

など、まだまだ書ききれないほどインターンシップでは素晴らしい体験が出来た。次に、次年度以降のインターン生がより充実したインターン生活を送れるようにいくつかアドバイスをしていこうと思う。

1. 気を張り詰めすぎないこと

これが私のできる1番のアドバイスである。気を張り詰めすぎると私のように頭痛で寝込み BBQ に参加できないというような悲劇につながるので、常に心にある程度の余裕を持っていてください。

2. 散歩をしよう

村民の方々は初めて出会った方でも挨拶をすれば話をしてくださり、貴重な話や村についての色々な話を伺えるので、積極的に散歩をしましょう。夜に散歩をするのは暗くて危険であり人とは出会えないので朝方の散歩をおすすめします。私は毎日のように寝坊していたので思うように散歩できませんでしたが。

3. 自然を満喫しよう

川上村は豊かな自然にあふれています。時間を上手く活用することが出来れば川遊びも山遊びも十分に楽しむことが出来るので、この機会を生かして自然を満喫するのもいいと思います。

出会う人々への感謝を忘れずに、これらを空いた時間に行うことが出来れば最高のインターンシップ生活を送れると思います。

最後に

インターンシップを通して私が得たものは数多くある。その中でも特に私にとって意味があったことは、やはり多くの人と関わりを持つことが出来たことにあると考える。意識の高い仲間と囲まれ彼らの意見を吸収し自分の物にすることで私自身の物事に対する考え方が広がった。

また、実際に林業を体験することによって森を守り続けることの大変さについて身をもって体験することが出来た。

これらの経験は、これからの私の人生に役立ち、また豊かにしていくものであり、このインターンシップで得たものは計り知れない価値のあるものであったと私は確信している。



平成 28 年度 川上村地域づくりインターンシップ 報告書

関西学院大学 社会学研究科
博士課程後期課程 1 年
奥田 絵

1. はじめに

自身と川上村との関わり

- ・ 大学では自然と人間との関わりについての学問（環境社会学）を専攻しており、「水源地の村づくり」を提唱する川上村に関心があった。
- ・ 昨年度から森と水の源流館のイベント（水源地森のツアーなど）に源流人会として、ボランティアで川上村に幾度か来村した経験を持つ。

インターンシップに参加した目的

- ・ 自然災害やダム建設などで集落が争った経緯から人口減少に苦しむ川上村は、どのような地域づくりをおこなうことで地域活性化を目指しているのかを知ること。
 - もともと大学の調査実習等を通して、中山間地域（三重県熊野市の山村地域）の地域づくりを学んでいたため、中山間地域の地域づくりに関心があった。
- ・ 中山間地域のなかでも川上村は、1996年に「川上宣言」を提唱して環境に配慮した「水源地の村づくり」をおこなうなど、地域性を生かした特徴的な地域づくりをおこなっているため、インターンシップに参加することを決定した。

2. 地域づくりの現状と課題

2.1. 川上村の現状

台風とダムに打撃を受ける川上村

- ・ 1959年の伊勢湾台風により、大和平野の農業用水を供給する大迫ダムだけでなく、主に治水を目的とした大滝ダムの建設が1960年代から計画される。
 - 大滝ダムは、着工から竣工まで50年以上の歳月を要するほど、地域内外で賛否がわかれ、それにより人口減少が進むことになった。
 - 大滝ダムは、2003年には試験たん水を実施したことで白屋地区に亀裂が入り、地滑りの危険性から移転を迫られるなど、水没地域以外にも大きな影響を与えた。

⇒台風やダム建設より多くの負担を強いられた川上村は、吉野川（紀ノ川水系）の水源地の村として地域づくりを進めていく。

2.2. 水源地の村づくりの実践

- ・ 1980年代に湖底サミット、全国川上サミットが開催されるなど、流域地域の水源地保全に関心を向けられるなか、川上村は1996年に「川上宣言」を提唱するなど、

水源地の村づくりを提唱する。

- ・ 水源地の村づくりを進めるため、川上村が誇る原生林・人工林などの自然環境や吉野川を守ってきた歴史・生活様式を残していく。
 - 樹齢400年とも言われる下多古の人工林「歴史の証人」や原生林740ha「水源地の森」を川上村が所有者から買い取るなどして、人々が守ってきた生態系を保全している。
 - また、「森と水の源流館」で吉野林業の歴史や川上村の民家を展示するなど、人々が水源地を守ってきたこれまでの歴史や生活史を川上村が積極的に残すことで、水源地の村づくりを推し進めている。
 - これまで水源地を守ってきた生態系・歴史・生活史を「源流学」として見直すことで、これから未来に水源地を守っていくために何が重要かを示している。
- ・ 一方、ダム建設の賛成／反対で大きく揺れた川上村においても、大きな問題となった旧白屋地区に企業・団体と協働して「未来の風景プロジェクト」を2015年度から実施するなど、ダム建設後の地域づくりをおこなっている。

⇒水源地の村づくりとして、源流学を提唱して積極的に水源地を保全する活動をおこなうと同時に、ダム建設後の地域づくりを推し進めるなど、ダムと地域づくりを共存可能なものにしていく試みが実施されている。

2.3. 水源地の村づくりの課題

今後の源流学の展開に関して

- ・ ダム建設を終えた現在、「森と水の源流館」を軸に展開されている源流学は、ダムをどのように受け入れて水源地の村づくりに位置付けていくのかを明確にすることが必要なのではないか。
 - 本来であれば、自然環境破壊や地域の伝統文化を崩壊させかねないダムであるが、水源地の村としてダムがもたらす良い側面を取り上げていくことも、源流学の責務になるのではないか。

大滝ダムをどのように利用していくのか

- ・ 防災に必要な大滝ダムであるが、イベント等でダムの見学は可能なものの、森と水の源流館と比べれば、イベントでダムを利用することが少ないように感じる。
 - ダムの見学、ダム湖を利用したカヌー体験などはあるものの、新しくできたダムの資源を十分には活かせてないのではないか。
 - 地域住民に対しても、大滝ダムがどのような役割を果たしているのか知ってもらうために、村内の住民に対して何らかの行動が必要なのではないか。

源流学とダムとの連携に関して

- ・ 源流学を提唱する「森と水の源流館」や、「大滝ダム・学べる防災ステーション」や「紀の川ダム統合管理事務所」などのダムに関わる施設など、各分野に特化した機関はあるものの、これらの機関が連帯して水源地を保全していく活動を模索

していくことも必要なのではないか。

⇒ダム建設に賛成であろうと反対であろうと建設された事実は変わらないので、逆にダムを利用した地域づくりを視野に入れていく方向に向かうことが、水源地の村づくりをおこなう川上村にとって重要なことである。

2.4. 地域づくりへの提案——源流学とダムとの共存に向けて

提案①ダムを含めた源流学の提唱

- ・ 森と水の源流館で、水源地としてダムを受け入れた経緯やダムの役割を解説するコーナーを設けていくこと。
 - 水源地の村づくりは、生態系・林業の歴史・人々の慣習だけでなく、水源地に建設された治水管理の能力や、ダム建設によって得たもの／失ったものを展示することで、水源地が担う役割がどれほど重要で、下流のために犠牲を余儀なくされたのかを示すことができるため。
 - 森と水の源流館がダム建設に関わる展示をおこなうことで、「大滝ダム・防災ステーション」や「紀の川ダム統合管理事務所」との連携が生まれる可能性がある。
 - 大滝ダム・学べる防災ステーションや紀の川ダム統合管理事務所においても、源流学に配慮した環境への配慮や、流域連携のイベント等をおこなうことも重要である。

提案②ダム周辺の観光化の推進

- ・ カヌー体験の拡充など、ダム湖の有効利用を模索すること。
 - ダム湖を利用した活動として地域おこし協力隊の安田さんが力を入れて取り組んでおられるカヌー体験をより拡充することで、ダム湖の資源を有効に利用していくことが可能になる。
- ・ 観光放水やダム施設の案内を充実させること。
 - ダムを観光資源として、観光放水を実施することや他のダムにはない大滝ダムの特徴をよりクローズアップした施設案内をおこなうことで、ダムマニアなどをターゲットにできる可能性があるため。

提案③紀の川ダム統合管理事務所による地域貢献の必要性

- ・ 紀の川ダム統合管理事務所による、地域向けのダム施設の説明会を定期的開催すること。
 - ダムに対する複雑な感情を抱きがちな地域住民向けに、ダムの役割や必要性を行政的な視点ではなく、生活レベルの視点から説明することによって、川上村の人々がダムに対して理解していただける可能性が高まるため。
- ・ 紀の川ダム統合管理事務所によるイベントや地域行事の積極的参加
 - 紀の川ダム統合管理事務所はイベントや川上村の行事に積極的に参加することで、川上村の人々に対して好感度を上げることができるため。
 - ダムは地域住民の協力があってこそ建設できたものであるので、住民の方々

に対して真摯に向き合う必要がある。

⇒川上村が水源地の村づくりを推し進めていくなかで、ダムとどのように共存していくかを考えていくことが今後の課題になる。

3. おわりに——今後の川上村と自身との関係に関して

インターシップを終えてからの川上村の印象

- ・ 村内に仕事がないなど、苦しい状況に追い込まれているには変わらないものの、豊かな自然や人の温かさを肌で感じた。
- ・ 台風災害やダム建設によって川上村の様相が大きく変動したものの、これまで積み上げてきた人々の生活の知恵や技術が吉野川の水源地を保全してきたように感じた。

源流人会としての関わり

- ・ 源流人会の会員として森と水の源流館のイベントなどを通して、貴重な川上村の自然環境を保護するために、積極的に活動に参加したい。
- ・ 源流人会のもう一つの役目として、川上村が持っている素晴らしい村の環境を、自身の経験を踏まえて他の地域や人々に発信していきたい。
 - 身近な知人に川上村の素晴らしさを話すことから、ソーシャルメディアや大学院生として研究で報告するなどから、より広く発信できればと考えている。

個人的な関わり

- ・ インターシップで出会った地域の方々と、個人的な付き合いを続けていきたいと感じている。
- ・ 川上村の美しい山や川に遊びに行くことや、温泉に入って癒されにいくなど、観光客としての関わりも続けていきたい。

平成 28 年度川上村地域づくりインターンシップ報告書

同志社大学 法学部政治学科

2 年 垣木咲穂

- ・平成 28 年 8 月 25 日の報告会で実際に使用した資料

川上村地域づくりインターン報告会

同志社大学法学部
政治学科2年 垣木咲穂

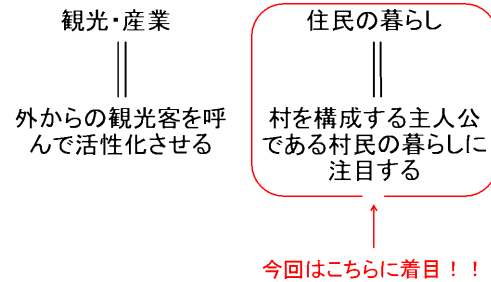
なぜこのインターンに参加したのか

- ① 地方自治への興味
「農村部が弱い」=本当?
↓
実際に自分の目で確かめたい!
- ② 新しいことへのチャレンジ

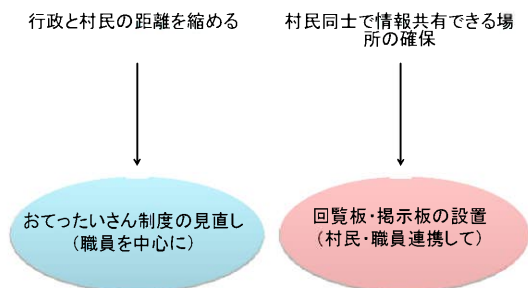
実際2週間過ごしてみて

- ・車があれば不便ではない
(ただし歩くのは危険)
- ・村民同士の距離が近い
- ・自分の視野が広がった
林業や環境という自分の中の新しいフィールド

「地域づくり」



私から川上村への2つの提案



おてったいさん制度の見直し

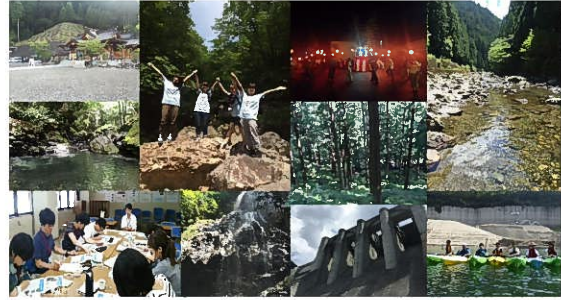
- ① 2年の任期
 - ② 事後報告の仕方
- 2つを見直すと...
- 村民の声を聞くことができる
 - ✕職員による調査だと本音を言わない可能性
時間の確保が難しい

回覧板・掲示板的設置

- 軒数ごとなどで分けて配布
重要な情報の見逃しを防ぐ
職員が配りに行くことで、地区を訪れる
きっかけになる
- ×面倒になる(見に行かない・回さない)
寝たきり・体が不自由な方はどうするのか

川上村と私のこれから

このインターンシップ中に訪れたところ・・・



出会った人たち・・・



- ① また川上村を訪れる
 - ・川上村を知らない人も誘って一緒に
 - ・自分だけの魅力を見つけられるかも
- ② SNSの活用
「この写真はどこ？」
↓
川上村を知ってもらうチャンス

自分との直接の関わり・外部への情報発信を
大切にしていきたい

「また会いたい」
「またここに来たい」
そんな場所・人に出会えたことが
2週間の中の一番の財産です！

ご静聴ありがとうございました！

① 川上村への提案

地域づくりは、観光などの「外からの地域づくり」と住民の暮らしに寄り添った
「内からの地域づくり」の2つに分けることができると考えた。
その中で、今回は内からの地域づくりに着目し、2つの提案をした。

・おてったいさん制度の見直し

「行政と村民の距離を近づける」という考え方には賛同できる。しかし、村民の話を知っていると、自分の地区のおてったいさんが誰なのか分からないなど、村民側からは少し距離があるように感じられた。

まず、事務的に2年で交代するのではなく（1年に1回など）村民の意見をアンケートなどで汲み取った上で交代するかしないかを定めることを提案した。しかしもし役場職員が村民に調査を行うとなると、村民が本音を言わないといったデメリットも考えられる。

そして、職員同士の事後報告の仕方の改善を提案した。従来通りパソコンによる共有に加えて、紙を課ごとに配って皆で目を通したり、時間があれば話し合う場を持ったりすることで職員同士のやり取りが円滑になることが期待されるのではないだろうか。

・掲示板の設置

8月25日の報告会では回覧板を含めた提案をしたが、手間や実現性を考えて本報告書では掲示板に絞った提案に切り替えることとした。

村民同士のコミュニケーションは地域づくりの構成要素の内の大切な物の一つであると私は考える。さらに滞在中に村民の方に話をうかがった時、広報をあまり読まないという意見を耳にしたことから掲示板の設置という提案に至った。

掲示板には役場側が重要な情報を掲示するコーナーと村民が自由に使えるコーナーを設ける。役場からの掲示物はおてったいさんとして担当になっている地区ごとに役場職員が配ることで担当地区を訪れることが出来、村民の暮らしに近づくきっかけの一つになると考える。また、掲示板と共に屋根やベンチがあれば（東屋のようなもの）、村民の語り合う場にもなる。

その費用をどこから賄うのか、体が不自由な方など外に出歩くことのない人はどうするのかなどの問題点が考えられる。しかし地区ごとに掲示板を含めた東屋を設置すると、村民はそこで団欒することが出来るし、役場側も村民に近いところで情報提供が出来る。

② インターンシップを終えて…川上村とのこれからのつながりについて

自分との直接の関わりと外部への情報発信という2つのつながり方があると考えている。自分が川上村を知らない人を連れて村を訪れることも、SNSで川上村

のことを載せることも、どちらも他の人と川上村をつなぐきっかけになる。こうして他人に川上村について紹介することで、私自身新たな視点を得て村の新たな問題点や魅力に気づくことが出来るだろう。自分だけで川上村について深めていくことも良いことだが、まだ川上村のことを知らない人に村の好きな場所や魅力を見つけてもらいたいと考えている。今回の私のインターン活動をとおして川上村について興味を持ってくれた人がいれば嬉しいものである。

③ 川上村地域づくりインターンシップの感想

毎日新しい情報が入ってくるので、最初はその情報処理に追われて正直川上村での生活を楽しむことができなかった。しかし私を除いたインターン生6人がいてくれたからこそ、見方を変えて楽しみながら学びを深めることが出来たのではないかと考えている。

今回のインターンシップでは、私は地方自治のあり方など行政面を中心に考察したいと考えていたが、実際現地で林業の現状や自然環境について学ぶことで自分の中の知識のフィールドが広がったように感じられた。そして、自分の専門分野を研究するためには他の分野の研究も必要であるということも感じさせられた。

2週間という短い期間だったが本当にたくさんのことを吸収することが出来た。なかでも、報告会で使用したスライドにもあるように、「またこの人に会いたい」「またこの場所に来たい」と思うことが出来たということが私にとっては一番の財産となった。突然やって来た私たちインターン生にも、川上村の人々は皆暖かく接して下さった。顔を見たら挨拶をするということも本来なら当たり前のはずなのだが、都市部では実践している人はあまり見かけない。今や近所の人でさえ交流がなく誰かわからないといった都市部の現状に少し寂しさを覚えた。様々な技術が進歩して便利になった生活のなかでも、他人とのコミュニケーションを大切にすることが重要だと気付かされた。

実際に川上村にいた時はいろんな場所に連れて行ってもらったり、いろんな人とお話しをしたり忙しい日々を送っていた。しかし改めて考えてみると、川上村の持つ美しい自然や人々の温かさに素直に感動したり、村の持つ歴史や現状と向き合ったりできたことは本当に貴重な体験だったと胸をはって言うことができる。今回のインターンシップで出会った全ての人に感謝するとともに、学んだことや感じたことを忘れずに、今後の生活を送っていききたい。